

「愛知の児童文化」資料集・聞き書 3

中京大学文化科学研究所
児童文化研究グループ

本研究所児童文化研究グループでは、1995年以降、愛知の児童文化研究に取り組み、その調査・研究の成果を『文化科学研究』に連載。'99年3月にはそれぞれの論集をまとめ、文化科学叢書『愛知の児童文化』と題して、KTC中央出版より刊行。さらに同年10月には、愛知の児童文化に関わる文化人、文化団体、文化施設、事項など、計513項目にまとめ、『愛知児童文化事典』を同出版社より刊行した。なお、この二冊の本は児童文化面での地域研究の先駆として評価され、第24回日本児童文学学会特別賞を受賞した。

ところで、ここに掲載する〈聞き書3〉は、この地域で児童文化に貢献した人びとの活動の足跡であり、上記の本の補填であるとともに、『文化科学研究』Vol.12 No.1、Vol.14 No.1に発表した「聞き書1、2」につづくもので、それぞれの文化人による時代の証言でもある。

山田智子氏インタビュー 2002年12月19日 中京大学文化科学研究所にて
聞き手：原 昌

山田智子（やまだともこ）演出家、劇団「杉の子」代表。1915～ 名古屋市生まれ、名古屋市立第三高女（現旭丘高校）卒、国立教育研究所青少年指導協力者養成所（C.O.C）卒。

[主要業績] 「赤い靴」（演出、中小企業センターホール、'66）、「しいのみ・かしのみ・おぼけのみ」（演出、名古屋市民会館中ホール、'81）、「不思議な森のものがたり」（演出、同、'94）、「いたずらゴンちゃんとかども達」（脚本・演出、同、'96）ほか。1989年、全国児童青少年演劇協議会特別賞受賞。

聞き手 先生が児童劇と出会われた頃からの話を伺いたく思います。まず戦前のことからですね。子どもの頃のことで、何か思い出となっていることはございますか。

山田 石井漠さんのおどりで、御園座だったか、あの当時まだ名古屋市の公会堂が出来ていなかったと思うんですけど、そうすると、御園座ですね。御園座は私の祖父が社長をしていたものですから、それでよく行きました。

聞き手 それは何年頃の事になりますか。

山田 小学校の3年か4年位じゃなかったかと思うのですが。

聞き手 それが、子ども時代での演劇との出会いと言うことですね。

山田 つまり、親に連れられて行ったと言うことの思い出を持っていますね。それと、石井漠さんの《青の洞門》とか何とか、題名に「洞門」と言う字がついたような気がするのですが。上手に洞門のような物があって、そこへスーと入って行く時の後ろ姿が照明とともに印象的で、今でも目に残っています。そこになんとか哀愁じみたような気がしました。子どもですから哀愁とは言いませんが、なにか寂しいものを感じましてね。それと川上児童劇団のお伽芝居をよく見ました。

聞き手 川上音二郎の小波お伽芝居ですね。

山田 たしか《桃太郎》を見たと思うのですよ。花道を使って、御園座でした。

聞き手 そのころ御園座でもお伽芝居をやっていたのですね。

山田 ええ、やっていました。あの頃は他にやる所が無かったのでしょうかね。後はクリスマスに教会で、子どもさんたちが、いわゆる劇と言うたぐいの物をやりましたね。それから、お寺が私の家からオルガンを持って行って、子どもに歌を教えていたんです。そんなことが、今から考えれば児童文化の礎ですかね。

聞き手 そのころ、お寺でストーリーテリングや、口演童話が盛んに行われたと言うことを聞いています。

山田 ええ。それに、寺で歌の練習をさせてもらいました。夜、お父様方がお勤めからお帰りになると、子どもを連れて行って、1時間半か2時間でしょうね。それから、お寺のお坊さんが色々なお話をしてくれたのです。

聞き手 お話と言うのは物語ですか。おそらく仏教系のお話でしょうね。

山田 ええ、仏教系です。あまり記憶には残っていませんが。

聞き手 お寺でお伽芝居をやることは無かったのですか。

山田 無かったです。クリスマスのときに教会がやったのでしょうか。他でもやっていたでしょうけれど、私の家が仏教徒だものですから。

聞き手 日曜学校が盛んな時期もありましたしね。教会関係ではやっていたとは思いますがね。

山田 やっていたのでしょうかね。それと、当時、学校では学芸会を必ずやりました。

聞き手 小学校ですね。

山田 私が小学5年生位でしたが、学芸会で《舌きり雀》をやったのです。たしかお婆さんでした。脚本は先生がお作りになるのですが、父親の悪口を劇の中に入れていて、父兄ですが、お客さんがゲラゲラ笑っていました。私も家で《舌きり雀》の練習をしようと、二尺差しを立てている写真が残っています。

聞き手 そうでしたか。このころ、ずいぶん子どもの脚本も出ていましたしね。ご自身も小学校時代には学校劇に出演されていたわけですね。

山田 はい、そうです。いわゆる劇と言うほどの物でもないでしょうけれど、やっていましたね。ですから、嫌いではなかったのです。

聞き手 それが、初期のお芝居との触れ合いとなるわけですか。

山田 触れ合いとなるのは、むしろ明德少女苑に勤務した時でしょうか。

聞き手 そうですか。ところで、小学校を終えられて現在の旭丘高校（名古屋市立第三高女）へ行かれたのでしたね。その女学校時代に演劇は如何でしたか。

山田 別にやっていませんでした。その後、「C・O・C」を卒業したときに青年劇団に入ったのです。

聞き手 「C・O・C」と言うのは？

山田 C・I・Eが中心で作った国立教育研究所青少年指導協力者養成所として、民主教育とはなんたるか、と言うことでした。私、このころの日本人にこの教育は向かないと思いました。でも、その中で良かったのは、アメリカの児童文化でした。その時ですね、私が児童文化に携わっていかう思ったのは。それで卒業のときに進路希望を出すのですが、私だけでしたね、児童文化は。そこで、児童課へ行きましたら『児童文化』で何をするんだ。」と言われてましてね、自分でどうしたもんだと思っていまして、八事に少女苑が出来るから、そこの教官になれ」と言われて行って見たんです。そこが国立瀬戸少年院分院「明德少女苑」だったのです。教官になることは私の主旨と違うと思ったのですが、子どもが悪に染まって行くいろいろなことを知ることが出来ましたし、良かったです。

聞き手 いい経験でしたね。

山田 八事に川が流れていましてね、食糧難でしたから、子どもたちを連れて川べりで農耕作業をしていたのです。たまたま川で、5、6歳の子が遊んでいるのを見て、そうだ、この少女たちをまともにするのに、小さい頃のことを思い出させようと思ひまして、子どもに聞いたのです。「ああして小さい頃、遊んだ？」と。「うん、遊んだよ！」と、その目の輝きが違いました。私は「これだ！」と思ひましたね。やっぱり子どもは親と一緒に何かをすることが必要だなと。自分自身の体験からもそう思ひましたし。それからですね、では私がどうしたら良いのかを考えました。当時戦後で殺伐としていましたし、情操的なものも加えなければといろいろ考えた末、演劇でしたら、歌あり、踊りあり、その劇の中に教訓的なことも入れられるだろう。そうすれば、自然のうちに情操も身につくだろう。それで児童劇と言うことを考えたのです。ですから私はあの罪を犯した子どもたちのお陰で、児童劇をやろうと決心したのです。その時の園長が昔、朝日新聞の記者をしておられました伊藤なつこさんで、私を応援してくださって「ここで劇をやろう」と言ってくれました。

聞き手 それは珍しいことですね。それで少女苑の子どもたちと一緒に劇を作っていたのですか。

山田 はい、そうするつもりだったのです。ところが、子どもがマッチを盗みましてね。危ないですから、探させたのです。そうしましたら、ある部屋から出てきました。そうしましたら、その部屋の子どもたちが「私たちは盗ってない」と当時ジュラルミンの下敷きで指を切って、それで血書をしてきました。それで私はお説法したのです。血書とはどう言う物だと。私は「罰を与えるから音楽室の板の間に1時間座れ。私も座るから」と。まだ寒い時だったのですが、子どもと一緒に座ったんです。私は何でも子どもと一緒にやったんです。そう言うことをしているうちに自分の身体を壊してしまいました。それで私はここでやっていたはいけないと思ったのです。そんな時たまたま県の教育委

員会から文化課に招聘があったんです。ところが最後の別れの前に子どもたちが「先生、今日は泊まって行って」と言ったんです。それで「あなたたちの食事しかないから、私はお米も持っていないし」と申しましたら、「いいよ、私たち皆が一膳つつ減らして先生の分出すから」と言ってくれてね。私その時は泣きました。

聞き手 そうでしたか。私も少女苑を訪問して作文を見せていただいたことがあります。みんなあどけない子どもたちなんですよね。本人よりも家庭にかなり原因がある子のように見えました。その後、文化課に移られたんですね。県の文化課ではどのようなことをされたのですか。

山田 文化振興ですね。青年団などの演劇指導なんかをしました。それと同時に県の教育委員会で巡回演劇がありましてそれに加わりました。

聞き手 巡回演劇と言うのはどんなことをされたのですか。

山田 県下の青年団とか婦人会とか、なかには子ども向けにも良いものがありますから、土曜日の仕事を終えてから移動図書館の車を借りて青年劇団を連れて色々なところを巡回したんです。それと、当時青年団がいろいろお芝居をしたりしてまして、その指導もしました。東京で青年団の全国青年の競技会がありましたのでね。その時には劇も出しますので、その指導なんかもしました。

聞き手 それは県の主催になる訳ですね。では、青年劇団に所属しつつ、文化課におられた訳ですね。

山田 はい、そうです。昼間仕事をして、夜は青年劇団で教えましたし、教えたと言うか独学で勉強したと言う部分もありました。

聞き手 それでは、青年劇団に入られたのはどう言うきっかけでしたか。

山田 私は児童文化に携わりたいと思っていて、何かのセミナーで小林さんのお話をお聞きして、ちょうど青年劇団が児童劇をやっていたものですから入りました。それと中川龍一先生の影響もありました。それと、寺田栄一さん。

聞き手 そうですね、当時でのそうそうたるメンバーですね。その劇団ではどう言う事をおやりになったのですか。

山田 その前に《土》と言う劇を労働会館で見て、照明家になろうと思いました。それで、青年劇団に入ったときに裏方を希望したのです。ところが、岡江先生に舞台監督をさせられまして、監督と照明、衣装だとか、音響効果だとか、音楽だとか全部させられました。

聞き手 それはプロデューサーのような役割ですね。

山田 そうですね。その内に青年劇団は児童劇から新劇に変わっていったのです。

聞き手 すると青年劇団は最初児童劇からだったのですね。

山田 はい、児童劇です。小林先生は戦前大須で子ども会をやっていたらして、たしか先生の19か20くらいのときですね。大八車に道具を乗せて行ったと言ってらっしゃいました。それで新劇になって初めて行われたのが、石坂洋二郎の《若い人》でして、これが私の演出になりました。

聞き手 《若い人》ですから青年向けのものですか。

山田 はい、大人向けです。私はこれではいけないと思いました。そのとき東京の演劇協会に羽田芳郎と言う先生がみえまして、早稲田の学生を連れて犬山へ来られたときに、児童劇をしたいと相談し

たんです。そうしましたら、「名古屋には本格的な児童劇はないからぜひやりなさい応援するから」と言われまして、17年間いました青年劇団を辞めました。それと同時に児童劇の舞台にアマチュアとして、お母さんやお父さんも一緒に劇をしてもらいたかったんです。子どもと共通の話題が出来ますでしょ。それを狙ったんですが無理でしたね。私は親にならなかったのだから分かりませんが、客観的にみてどの親さんも子どもの前ではいい格好をしたくて、恥をかきたく無いのしょうね。でも、子どもの前で自分の無力さを出して恥をかくことが、子どもに大変親近感を持たせると思うんですけど。私はそうでした。

聞き手 そうすると、子どもが演じて親子で見て貰いたいと言うのが願望だった訳ですね。

山田 ええ、はじめは親子一緒にやる芝居をやりたかったんです。当時「親子断絶問題」がありましたからね、親子が手を繋げると思ったんです。それが自分の思うとおりにならなかったんです。お芝居の場所として、桜通り本町にある桜天神社で社務所の一室をお借りしました。

聞き手 団員の募集はどうされたんですか。

山田 新聞広告です。新聞広告と言っても、広告料は出ませんから、新聞記事にさせていただいたんです。青年劇団にいたときにいろいろな新聞社の方々を知っていましたから。

聞き手 ニュース性がありますね。この辺にない子ども劇団を作ることでですか。

山田 ところが、親さんは当時コマーシャルとか子役とか世の中にアピールするようなことだと思ったんです。私は「そうじゃ無い。マスコミにはのせない。」と言う主旨でした。ですから、入って来る人は少ないですよ。その時巢山プロがありましたし、皆そちらへ行かれました。

聞き手 巢山プロはその時分からありましたか。あそこはプロ養成を旗印にマスコミとかテレビにと出ていましたからね。

山田 私は子どものことで儲けたくない。お金儲けは自分の腕で稼ごうと思ったんです。ですから、月謝も安かったですし、赤字を出していましたね。自分の不得手で赤字を出すのですから、自分で賄うのは当然ですから。

聞き手 文化行事と言うのは、儲けにはなりませんね。でも、集団でやることですから、演劇を通して子どもの人間形成にもプラスになって行くことですから。

山田 はい。劇団をやっけていまして、夏休みなんか都合させたらと思ひましてね。合宿を通して子どもたちに輪が出来ますしね。そこで、私が「やろう」と言うのではなく、大きい子たちに合宿の話を持ち掛けてみたんです。子どもたちは「いい、やって！」と言うんです。ですから「やってじゃない。あなた達がやるのだよ。大きい子達が小さい子達の指導、面倒もみるんだよ。」その頃は人数も増えて年齢層もありましたしね。一週間やりましてね、そこで、定期公演の作品を仕上げたんです。やはり合宿の結果は良かったですね。

聞き手 合宿先は何処でされたんですか。

山田 日進の方にある青少年公園でした。

聞き手 それは、子どもたちにも一生のいい思い出になりますね。

山田 そうかと思います。自分勝手な思いかも知れませんが。

聞き手 最初の頃はどんな演目をおやりになったのですか。

山田 子どもが活字離れしていると言うので、本を読ませるためにも有名な作品をやろうと思いました。そこで、第1回の定期公演はアンデルセンの《赤い靴》をやりました。

聞き手 脚本はご自分でお作りになったのですか。

山田 元がありました。脚色は元CBCにいらした柴田さんがしてくださいます、それを団員に合うように許可を得て、私が潤色したんです。

聞き手 それが最初の公演でしたか。

山田 その前には、《マッチ売りの少女》を「年忘れ子ども大会」「新年子ども大会」で上演しました。

聞き手 子ども大会と言うのは、各地域にあったのですか。

山田 ありません。劇団「杉の子」主催で行いました。

聞き手 アンデルセンを最初に舞台化されたのですね。

山田 やはり、アンデルセンが一番いいだろうと思ひましてね。出版社からアンデルセンの本に書いてある絵のスライドをお借りしまして、スライドを見せてアンデルセンとはどう言う人か、どんな作品があるか、こんな所がおもしろいとか劇の前に子どもたちに見せました。それから、「赤い靴」の劇をしたんです。はじめですから会場費もありませんから、南図書館のホールを借りましてね。教育委員会の文化課時代に移動図書館や図書館関係の仕事をしていたこともありまして、そんな関係で図書館の館長を存じあげていましたから、館長にお話をして安い料金でお借りしたんです。次に、私はアマチュアですから、見に来てくれた子どもさんたちになにかプレゼントをしようと思ったんです。そのためには、やはりお金がいるんですね。そこで、図書館に本を入れて頂いていたカワセ書店の内藤さんに相談したんです。どこか出版社に子どもの本の付録で余った物があったら寄付をしていただけないかと。そうしましたら、講談社からも、小学館からも、いろいろな寄付をしていただきました。なかには鉛筆までいただいて、文房具ですね。それを全部子ども達に配ったんです。

聞き手 お土産ですよ。だいたい年に何回の定期公演があったんですか。

山田 定期公演は1回です。それ以上出来ません。

聞き手 時期は何時頃ですか。

山田 夏休みです。

聞き手 新年の子ども会は別にされたのですね。

山田 定期公演をやりますと、大きな赤字を出します。入場者も少ないですし、名古屋と言う所は、地元のを軽視するんです。入場料は500円でした。それで電話がありました。「公演をやるそうだが、アマチュアでもお金を取るのか」と。

聞き手 それは、どう言うところからの電話ですか。

山田 一般です。女性の声でした。そこで、いろいろ仕込み費で大道具とかいりますので、一人で負担をすることは出来ませんからと言ったんです。すると「ただで見せろ」と。そんな風ですから、はじめの入場者は少なかったですね。

聞き手 でも、名古屋市とか愛知県とかの図書館を主舞台にされたのですね。

山田 南図書館は1回だけでしたね。後の新年は岡崎でしました。教育委員会で一緒でした方が、岡崎で校長先生をしていらしたんです。

聞き手 年1回の定期公演は名古屋だったり、岡崎だったりしたわけですか。

山田 いいえ、もう名古屋でした。当時は中小企業センター、今の商工館ホールです。

聞き手 商工館ホールが主舞台でしたか。

山田 はい。市民会館が出来てからは市民会館でしました。職員になりましたしね。でも会場費は、きっちりと取られました。(笑い)

聞き手 そうでしょうねえ。(笑い)

山田 なぜ市民会館を使ったかと言いますと、会場をよく知っているということもありましたが、子どもには劇の本物を見せたいと思ひましてね。盆があり、盆は回ります。花道があり、せりがあり、それらを全部理に叶ったように使えるように脚本も書きました。それらを使いますと、子どもたちも一体化してきますから。

聞き手 そうですね。それで最初は少ないこともあったでしょうが、大体観客の動員はどの位だったのですか。

山田 2～300人位の事もありましたし、でも1000人までいかないですね。8～900人ですね。ですから最後の平成8年の時は300万円位赤字を出しました。

聞き手 そんなにですか。

山田 大体毎回そうです。100万円以上、200万円位の赤字です。ですからボーナスは全部それに注ぎこんでしまいます。入場料が大人1000円、子ども500円ですから、よくいって大人1500円、子ども800円ですか、アマチュアですのでそんなにいただけません。

聞き手 よくやって来られましたね。私にはとても出来ませんが――。

山田 そこには、やっぱり意地もあったんです。それに男社会ですからね。散々私、男性から女のくせにと言われることもありましたし、だから裏方さんでもやっぱり女だからと言うことがありました。

聞き手 前にも述べられました、名古屋の地域は地元に対してわりと冷たいですね。しかも子どもの劇団だからと言うことで。

山田 そうです。「子どもだまし」と思われますし。だから行政にも言ったんです。「子どもだましと見てくださるな、見てからにしてくれ」と。私も意地っ張りですから、「プロ劇団なんかに負けてなるものか」と思ってやるからお金がいるんです。

聞き手 〈子どもだまし〉ということで、私も昭和40年頃から児童文学をやってきていますから、それは冷たい目で見られましたよ。今は少し市民権が出きましたし、学会等も出来てきましたからいいのですが――。

山田 子どものものに対しては行政も冷たかったのですよ。

聞き手 今でも冷たいですよ。児童政策はいつも犠牲になっています。

山田 行政に資金をくれとは言いません。せめて広告してくれたり、見に行けと宣伝してくれないかと思うんです。

聞き手 そうです。少しサポートしてくれますとねえ。それは新聞マスコミ関係も理解は少ないですよ。当時新聞で児童文化とかは、婦人欄で扱い、文化欄には記事やエッセーを載せてくれませんでしたからね。ずいぶん抗議して載せるようになりました。

山田 では、その後からなんですね、私がやり始めたんのは、助かりました。

聞き手 そうしますと、「杉の子」は何年になりますか。

山田 昭和37年8月に発足しましたから、もう40年位になりますかねえ。

聞き手 児童文化に関心が持たれて、1960年代にはかなり盛り上がりましたが、劇団の方も波があって上昇したときもあったのでしょうかね。

山田 波があるのでしょうか、なかなか上へ上がれなかったのです。ようやく最近認めていただいて、昭和60年鯨光会から児童文化に貢献したと言う事で、愛知一中創立百年祭記念基金より記念賞をいただきました。

聞き手 何処からですか。

山田 鯨光会。昔の愛知一中と私が卒業しました市立第三高女と現在の旭丘高校と三つ合体しました同窓会が鯨光会です。そこから頂いたのがきっかけで、平成元年には全国児童青少年演劇協議会から特別賞。平成4年には全国税理士共栄文化財団から130万円、翌平成5年には東洋信託文化財団から50万円の助成を受けることが出来ました。私、〈バカ〉だものですから、東洋信託からいただける時には、昨年税理士財団からもいただいたからと言いましたら「それとは別ですからいい」と言われましてね。(笑い)

聞き手 正直な。それは、そうでしょう。(笑い)

山田 ちょうど、財政上の理由から辞めようと思っていたものですから、本当に助かりました。

聞き手 じゃあ、辞められないじゃないですか。

山田 辞めるどころか、私、賞状を持って思わず、「生ある限り続けます」と言ってしまいました。

聞き手 その頃、どの位の劇団員がいらしたんですか。

山田 12、3名しかいませんでしたね。

聞き手 そのころの代表的な演目と言いますと、どんなものがありましたか。毎年演目を替えたのはありませんよね。

山田 「赤い靴」を書き直したり、「しいのみ・かしのみ・おばけのみ」ですね。中条雅二先生の作品で食べ物を大切にしないで木の実を乱雑に捨てるので、木の実が化けて出て子どもを懲らしめると言うお話なんです。それを柴田さんに脚色して頂いて、それを私が潤色してミュージカルにしたんです。

聞き手 ミュージカルですか。

山田 児童劇と言うのは、歌あり、踊りありですから。

聞き手 でも10年程前にいったん止められましたね。また復活されて、その後はどうですか。

山田 癌を手術したときに、劇団員の親さんが「昔、劇をしていたから」と指導して下さったんですが、軋轢が出来てしまい、皆やめてしまいました。一人だけ残りましたね。火種があって、また発足したんです。それから人工関節になったときには、長い間休みましたが、その間、私の親友の明石

さんに助けていただきました。

聞き手 その間、定期公演はどうされたんですか。

山田 一年間休みましたが、後はまた続けております。

聞き手 当時、夏休みには、公演されるのですか。

山田 はい、この頃は秋にやったりもしていますが。その間に「国民文化祭」と言うのが始まりましてね。最初は断わったんです。でもアマチュアとして子どもの交流と言うことを考えたんです。大人になってから、各国の交流と言っても出来るものではありませんね。それで、現地のさわだ小学校の子どもさんを10人ほどお借りしまして、「杉の子」の子どもたちと一緒に《しいのみ・かしのみ・おぼけのみ》をやったんです。それが、第二回「全国子ども舞台芸術大祭典」のときで、佐渡でした。私が週二回佐渡へ行って指導したんです。費用は勿論自腹です。佐渡と名古屋の子どもが同じ舞台に立つことは不可能に近いですよ。ですから断わって貰いたかったんですが、新潟の教育委員会が「それは面白い」と言うことで、言い出した以上断われなくなって行きました。佐渡へ見に来られた方が「来年は、金沢で国民文化祭をするから参加してください」と言われまして、金沢にも行きました。ですから定期公演が出来なくて、その時は休みました。

聞き手 佐渡の「全国子ども舞台芸術大祭典」は「国民文化祭」と関係があるのですか。

山田 ありません。この文化祭の第一回は断わった気がします。第二回が金沢でした。金沢でも現地の子どもと一緒にしましたから、やはり私が行って指導しました。一幕を「杉の子」で行って、二幕の歌とか踊りに現地の子どもたち10人位を加えてやったんです。それから、翌々年は栃木で開催されたんです。栃木は再三断わったんですが、向こうで話がどんどん進んでしまい、「もう、『杉の子』は出演することになってるよ」と言われまして結局栃木にも行きました。

聞き手 大変でしたね。それには、子どもも連れて行かなければならないですよ。その費用はどうされたのですか。

山田 それは親さんに出してもらいましたが、栃木の時だけは、私が身体を悪くしましたので、回収出来ずに今に至っています。もう時効ですが。

聞き手 それでは、先生はずいぶん子どもの文化に財産を投じられましたね。

山田 子どもに投じたのか、自分に投じたのか分かりませんが、そのお陰で私自身も満足していますから、道楽だと思えばいいじゃないかと思うんです。

聞き手 よく解かります。私たちも東海児童文化協会を作ってやって来ましたが、浮き沈みがあったりして、文化的行事では何をやっても出費ばかりで儲けにはなりませんでした。

山田 私、嫌な思いをするのですが、それは一般の方が「子どもの劇をやっていると儲かるでしょ」と言われることです。

聞き手 亡くなられましたが、川口さんの《ななし座》の活躍がありましたねえ。《杉の子》の設立とはどちらが先でしたか。

山田 《ななし座》が先です。《ななし座》はNHKと関係がありましたから、子どもは大勢いました。

聞き手 児童劇団で合同で発表会をすることは無かったですか。横の繋がりはどうでしたか。

山田 無かったですね。私はやりたいと思うんですが、でも考えてみれば、子どもがよその劇団へ流れていく事もある訳でしょ。ですから皆自分のお城を守りたいと言う事ではないでしょうか。

聞き手 そうですねえ。自分のお城を固める事で精一杯と言う事ですか。「ななし座」と「杉の子」位ですか、歴史のある児童劇団は。

山田 それと、巢山プロですね。あとは、幾つか聞きましたが、知らない内に消えていきましたね。

聞き手 巢山プロは、主旨がちょっと違いますね。

山田 嫌だと思ったことがありますね。NHKでのことだったと思うんですよ。NHKのプロデューサーに頭を下げている男性のあの姿を見たとき、実に寂しい思いをしました。そこまですなければならぬのかとね。そこに私が変なプライドを持つからいけないんですよ。結局それが出来ない自分が悪いのですが、あそこまではしたくないです。私「勝負は舞台だ！舞台は勝負だ！」と言うのですが。生意気のようなのですが、プロに負けない舞台がしたいんです。ですからお金がかかります。それと同時に、アマチュアの場合、児童劇だとか、子どものものにお金を借しんでいたら良いものは見せられないと思うんです。ある程度、照明とか大道具舞台装置、音響効果なんかもプロの方にやって頂きますし、大道具だけでいつも100万円は見ています。

聞き手 ところで、特別の思い出と言いますと、どんな演目でしょうか。

山田 やはり中条先生の《しいのみ・かしのみ・おぼけのみ》と、平成8年にしました《いたずらゴンちゃんとかども達》がいい思い出になりますね。

聞き手 それは、どんな思いがあったのでしょうか。

山田 《しいのみ・かしのみ・おぼけのみ》は青年劇団での先輩である明石りょうさんがひじょうに私を助けてくださったんです。もう明石さんもお亡くなりになったのですが、やはり青年劇団に資材を注ぎこんで大きな瓦屋さんでしたが、潰してしまわれました。《いたずらゴンちゃんとかども達》は、新聞で男子中学生のいじめによる自殺の記事を読みましてね。そう言う弱い子ではなく強い子になって欲しいという思いで、新美南吉の《ごんぎつね》と《てぶくろをかいに》を合体し親子の情愛を出して、お母さんたちにも見て貰いたいと思ひまして、自分で脚本を書いたものです。

聞き手 今後の活動については。

山田 残りの生涯、児童劇をつくりつづけます。

聞き手 長時間にわたり、先生の歩まれた〈道〉と、児童劇への強い思いを語っていただき、ありがとうございました。